

アナキスト連盟と九州地協

前に書いた首相官邸よりの帰途、九州行の急行列車内で、大声を発し『平民新聞』を売り歩いている、佐賀出身の副島辰巳とはじめて逢った。当時、副島は福岡市にいて、小副川善吾と共に博多人形を造るかたわら、月に一、二度上京しては、中央と連絡を取っていた。その往復は新聞売りである。新聞を売ることは、戦時中バラバラになった同志の結集を図り、アナ連健在を世にしらしめる手段であった。そればかりではない。新聞の売上げは旅費の足しともなった。当時、紙に不自由していた国民は、新聞紙にも飛びついた。副島の話によると「新聞の内容はどうでもよい、紙がほしいと、幾枚も求める者があったが、そういう人間には一部も売らなかった」そうだ。

『平民新聞』は、最初の一年位は、配給用紙の一部を横流しすることで印刷費が出たという。一九四六（昭和二一）年六月十五日、近藤憲二を編集発行人として第一号を発行した。一部三十銭であった。紙代は一九四七（昭和二二）年五月（二七号）には五十銭となり、七月（三三号）には一円となった。しかし私が副島から買った八月十五日付三六・七合併号は

特別に二円五十銭であった。（五七ページ参照）

私は車中で出合った副島を、数日後に訪ねた。そこには、井原・小副川の両君も居合わせて、急速に地協結成の話が進み、運動の手始めとして、九州全土の平民新聞購読者を足がかりに、各地で講演会を開くことになった。副島・井原達は佐賀、福岡で、鞍打・真木・小山達に渡りをつけ、私は炭坑地帯を飛びまわり、北九州の日炭高松坑で向野を見つけ、宮田町貝島大之浦坑では居初、直方市で亀石ますぐり（女性の同志）に連絡ができた。

亀石ますぐりは、当時地元で未亡人会を結成し、婦人解放運動に専念していた。後日、副島に彼女を引合せた際、副島は、あれは昔の同志、北村漢の女房だった人で、見おぼえがあるとひそかに私に語った。彼女は現在、市会議員として活躍している。

さて、一九四七年から四八年にかけて、毎月のように各地で講演会を開き、九州地協の基礎も固まった。メンバーは――

福岡〓副島辰巳、小副川善吾、青木弘、真子（大杉の娘・魔子）、はまだ狭田

久留米〓鞍打辰雄、真木応瑞、堀場菊松

佐賀〓井原中太、井原末九郎、小山一弥

筑豊〓杉藤二郎、居染初蔵、向野青年、亀石ますぐり、河内、その他青年グループ（御

幡、池田、藤川、未次、鶴）達

他にも鹿兒島・宮崎・大分・佐賀・長崎と各地方に同志は散在していたが、遠方の者は常時会合に出席できず、福岡周辺の十数人を主体に、毎月一、二回集まり討論し、行動をしていた。主として講演会を開き、無政府主義を論じた。地域によって演題を変えることもあったが、副島は主としてアナルコ・サンジカリズムについて、井原は四次元の世界、杉藤は労働者の解放問題等。勤務の都合もあって、私は佐賀県と福岡県の運動に主として参加した。中でも八女郡の北田形という農村は、主催が公民館とあって聴衆も多く『平民新聞』もよく読まれた。

当時、青年行動隊と名付けていた青年達を先頭に、私達演壇に立つ者も、皆一様に身体の前後に（サンドウィッチ様式）思い思いの文句を書いた厚紙で作ったものを首からブラ下げ会場まで行進したものである。北田形の部落をわかったのも、こうした異様な姿であった。この部落は、左となりは共產党、右は菊旗会（右翼）という隣接地を持つ中間の、戸数約七十戸の一寸した農村部落である。私達の宣伝が効いたのであろうか、隣り部落のボルや菊旗会の連中も入場し、ヤジを飛ばしたりしたが、私達弁士の威圧に恐れをなしたのか、途中からそれらしき者は退散してしまった。それほど私達は、熱意をもって反国家、反権力を堂々

と主張した。

この年は、大山郁夫の帰還、炭労結成準備集会、炭坑賃金のプール制実施問題等々、私個人にとっても多事繁忙な明け暮れで、上京も再々であった。上京の折は、芝愛宕警察署前にあった工業会館ビル内のアナキスト連盟事務所へ顔を出したのだが、ある時、私はそこで腹を立てたことがあった。東京在住のアナキスト仲間達も、さぞかし食糧に困っていることだろうと思い、仲間に分けてやろうと、炭坑を出発する時持てるだけの食糧を持って事務所を訪れた。事務所は二階にあった。その階段途中でプラカードを身につけた（サンドウィッチマンの姿）岩佐老人と逢った。老人は私と握手し、年寄りには新聞売りが適役さ、などと冗談を飛ばしながら元気に街へ出て行った。私は事務所の扉を開けて中に入った。そこには一人の男（後日、遠藤斌とわかる）が机に向かってひたむきに書きものをしており、私の挨拶に対して振り向きもしない。私はしゃくに障ったので、折角重い思いをして持って行った食糧を、そのまま持ち帰ってしまった。

その頃、東京での会合の出席は、ほとんど副島に一任した形で、私は連盟員の誰の家も知らなかった。副島という男も変り者で、我儘が強く、人と人との間を意識的にへだてるような処があった。また、私の知る範囲では大方のアナキストは、エゴイストである。私もまた

その例にもれないと思う。

九州地協の運営も最初二年位の間はうまくいったが、連盟がサンジカリズム論争に端を発し、石川三四郎の死後、家の問題等、個人的な感情も混じえて、純正アナキズムを唱えるアナキストクラブと二つになって活動が沈滞し、地協にもその余波が及んできた。

そのなかで、九州地方協議会は、毎月一回ないし二回の集会を開いていた。その時には、各自能力に応じた負担がきめられていて、たとえば、炭坑で働く者は米や酒を、佐賀県は魚類、博多は場所提供と資金を出した。しかし回を重ねる間に、この約束ごととは守られなくなり、場所は支障のない限りまわり持ちということになった。あつまる連中は、一升株の酒飲みが多く、会合の都度酒は不足勝ちであった。議論は盛んで隣近所の迷惑などおかまいなしの、徹夜の討論も辞さなかった。

共産党吉隈細胞とのたたかい

私は、炭坑の休日はほとんど副島、井原達と行動を共にしたが、平日は組合業務に熱中していた。爆撃は免れたというものの、炭坑地帯の生活環境は都会人の到底考え及ばないも

ので、住居、教育、保健衛生、何一つを取ってみても、全く人間らしい生活ではない。私は入山以来この事が頭に上っていたので、労組長になったのを機会に、これらの改善について賃金問題と共に会社側と交渉を重ね、労資の行すべき分野を取り決めた一種の協約を結んだ。小学校設立はその一つである。

当時、小学生はボタ山の周囲や田圃のアゼ道を、ハダシで二十分も歩いて、桂川小学校へ通っていた。小学校は役場の隣りにあり、桂川町の中央に位置する。勿論、この一校よりない。大人の足でも十五分はたっぷりかかる。また、道らしきものもない。雨の日や風の強い日など、学校を休む者が多く、いきおい学力は落ちる。また炭坑では雨具はおろか傘を持っている坑員家庭も少なかった。棟割長屋の納屋から職場へ行くにも、傘などささないで、手拭を頭にのせ小走りする。雨の日に雨合羽を身につけているのは、坑外棹取（運搬夫）だけである。傘がポツポツ坑員家庭に持たれるようになったのは、賃金の上昇を見た一九四八年頃からである。坑員家庭はそれほど食生活に追われていた。

さて、小学校の話だが、初めは低学年だけでも鉱業所内で教えたいと、会社や学校長に話を持ちこんだが言を左右にできなかなか応じてはくれない。仕方がないので、いささか権力行使ではあったが非常手段に出て、ほとんど一晩のうちに協和会館の一部を間仕切りして、

三教室を造り、労務職員で元訓導をしていたことのある連中と図り、一・二・三学年の男女共学をはじめた。この学習は三カ月位つづいた。この思い切った行為が父兄の賛同を呼び、山のボス達や前組合長も協力してくれるようになり、会社、学校、役場、教育委員会とそれぞれ手分けして説得に当たった結果、遂に鉱業所内の丘陵を整地して、桂川小学校の分校が建つこととなった。整地には、父兄は勿論、婦人会、青年団、一般の人達も勤労奉仕に参加したので、意外に早く学校は出来あがり、この分校は、三年経たぬうちに独立して吉隈小学校となり現在に至っている。この頃の炭坑が如何に非教育的な地区であったかを示す一つの例として、協和会館に於ける授業の思い出をあげてみよう。

教師の陣容の整わない最初のうち、私も週三時間の授業を受持っていたが、一番はじめに私は子供達に問うてみた。

「今、日本で一番大切な物で、白いものと黒いものがある。それは何でしょう？」

「黒いものは石炭、白いものはかあちゃん」

「なぜ、かあさんが白いのか？」

「顔中おしろいベタベタで、お父さん待つとるバイ」

黒い物は石炭とは流石に山どころ、我が意を得た答だが、白いものは当然、米とあるべき

だと予想していたにわか教師は、子供の答に驚いた。白い大切なものを米と言えるほど子供は米飯を食べてはいなかった。それに、顔中おしろいベタベタは、戦争後家の実態なのであった。炭坑で戦争ゴケと呼ばれる女達、戦死者の未亡人はもとより、夫を戦争に取られて、何時帰るとも生死のほどわからず、生活に追われている女達は、安い賃金で骨身を惜しまず働いてはいたが、心身の飢えを満たすために化粧に浮身をやつし男を求めている。子供たちはその事情を敏感に受とめていたわけである。

さて、学校の他に、鉱、職員の福利厚生施設として、炭坑の古い納屋を会社から借りて改装し、洗濯屋・パーマネット・理髪店・時計屋などの店舗も造り、それぞれの専門家を入居させた。その他、労組内に生活協同組合のようなものを作って、労組とは別の組織で安い物資を斡旋した。これ等の福利厚生事業は、労組の活動としては当然のことと、今日では受取られるだろうが、当時ではまだ珍しがられ、各地の事業場から見学や視察に来る人が相つぎ講演にもたびたび引っぱり出されたものである。

不便な山の中の炭坑だから、炭坑構内に郵便局を設置するのも、住民にとっては、長い間の要望であったが、私も早急に実現させたいと行動を開始した。まず青写真を用意し、再々熊本の郵政監督局へ陳情に出向いたが、一向に進展しない。事情は、桂川・碓井両郵便局長

の猛烈な反対運動があり、阻まれたのである。小さい田舎町の郵便局が、人口の密集した炭坑地区を失うのだから、必死になることは止むを得ないが、労組の内部に彼等の暗躍にのせられた者があったことは、私自身の不徳の致すところであったとはいえ、大きなマイナスとなった。しかしこの問題も時が解決し、二年後には郵便局が設置され、灰田藤吉氏（私の入山当時の榮寮寮長で元職業軍人）が、会社のお声がかかりで、初代の局長になった。

*

学校設立などで評判が良くなるにつれ、共産党細胞（吉隈細胞二百人位の勢力）の連中は私が少しけむたくなり、追い出し策を講じ出した。それは、麻生連合の組合長に祭り上げようというのだ。麻生連合は、同一資本の麻生の鉱業所、赤坂坑・山内坑・上三緒坑・豆田坑・久原坑（佐賀）・丘下坑（長崎）それに吉隈坑の七坑と、芳雄製工所（炭坑用具を作る工場）本社従業員組合の二職場を総括した上部組織である。間近かに迫りつつあった連合会の選挙に臨み、各炭坑各職場にいる共産党員をしてフラク活動を起こし、私を吉隈から連合体へ送り込むことは、彼らの大義名分も立つという処だったろう。私は山を離れる意志もなかったし、その手には乗るまいと心に決めてもいた。

杉藤が連合組合長になるらしいと噂が立ち出した時、稲見枅男が和田尊を伴って私の処へやって来て「決して山を離れてはいかん。今吉隈から君がはなれたら折角これまで頑張った君の努力が水泡に帰し、平山坑の如く共産党の指揮下に入れられてしまう。彼らはそれが狙いだ」と私の意中と同じことを言った。また稲見は「君の代りに僕が連合へ出るように働きかけても良い」と付けくわえた。そこで三人協議の上、代議員会を開くこととし、その工作を稲見と和田にまかせた。稲見と和田は実質的な勢力者で山の中堅層をつかんでいる。この二人の支持があったからこそ、私の組合長としての運営も大胆に最後まで通せたのである。後日、稲見は連合の副組合長、書記長と頭角を現わして行く。

このため共産党細胞は吉隈における勢力拡張を阻止されたうらみを機関紙『アカハタ』に載せた。その文章は全くのでたらめな中傷記事であった。しかも吉隈坑所内へ配った『アカハタ』は、その部分を墨で黒く塗りつぶしてあった。私は墨で塗りつぶされていない新聞を飯塚市に出て手に入れた。それを見ると、組合を誹謗したり、私が局長におさまるため郵便局設置に動いているとか、幹部のプライベートのことなどありもしないことがのっていた。私は『平民新聞』八二号に『細胞は労働者の敵か味方か』アカハタに抗議する』の見出しで反論した。

組合長として

当時、炭坑に働く者にとって、特に労組幹部の関心事は、炭坑国有化の問題であった。国有がどんなか、国家管理がどうなるのか、政治問題には暗い労働者達に、上部組織から流れてくる通達や指令は全く難解だったし、よほど政治に関心ある者以外、組合幹部といえども理解できなかった。いきおい私は質問の矢面てに立たされる身となった。私は思想が異なるので、このことを平易に説明するのに苦労したが、アナキズム的に共有化理論を説明した。

炭坑国管理論は社会党政府によって一九四七年九月二十五日国会へ提出されたが、浜田虎造（日鉄二瀬炭坑出身、参議院議員・社会党员）の内部からの裏切りにあい、野党の圧力も加わって修正の上、十二月二十日臨時石炭鉱業管理法（三年間の炭鉱国管）が公布された。

これによって、大手筋の炭坑も中小の山も同一賃金、いわゆる八時間（一方^{ひいあた}）労働の価を同一とし、全炭坑賃金のプール制実施となった。この時一方坑外夫三五円、坑内夫五〇円という35||50の基本が出来上った。それにしても、七月四日経済白書発表、続いて五日発表された新物価体系では、一八〇〇円ベースである。それに比較する炭坑の35||50は、一四四〇円

ベースとなり、如何に炭坑労働者の賃金が低く取扱われていたかがうかがえる。

この賃金ベースを上昇させるためにも、労働組合の大同団結を唱えた私だが、その機になか熟せず、とりあえず炭坑労働組合連合結成準備会をかねた賃金専門委員会を作り、各山からエキスパートが参加した。これに参加した主だった山は、日鉱（日本鉱山労働組合の略称・麻生連合が主力）炭連（日鉄）三井三山（田川・三池・山野）全石炭（日炭高松が主力）その他、古河・明治などであった。私は中央委員会の議長をつとめ、炭労初代組合長武藤武雄（常盤炭坑・日鉱系）を選出するまで頑張った。

炭労結成、賃金体系・労働協約・退職金制度規約等制定について、常時研究会ならびに集會に集った連中は、日炭高松坑水上勉、全石炭から元石某、日鉄二瀬坑小椋三次、麻生坑杉藤二郎、日鉱（前出。これは現在の全炭鉱の前身である）から、書記をしていた城平一憲（現在飯塚市の課長級）と重枝琢磨（現在全炭の重鎮）達である。私が高松炭坑の組合長達と協約や賃金問題などで話合うために、外出ばかりしていられたのも、正規な代議員会臨時総会の手順を踏み諒解を得たのは勿論だが、私のために万全の策を常時心掛け、私の代理として職場委員達と連絡を保っていてくれた、稲見をはじめとする十指に余る（和田三兄弟・矢野・中島・小林熊男・小林^茂・細川・東・竹下親子・万座・玉置たち）の強力なメンバー

の支持があったからである。それだけに私は、他から得てきた知識を次の代議員会や職場委員会に必ず披露して討議し、それに独自の思考や見解も駆使することにより、組合を運営することができた。

当時、政治家といえども闇買いをしなくては腹を干す時代だった。銀シャリ（米のめし）の馳走に預かろうというわけでもあるまいが、多くの先生方が、国会報告や視察を口実に、炭坑へ来たものである。形式的な視察を終えたと、かならずクラブ（坑員千人以上の大手筋炭坑にはかならずある、料亭とほとんど変らない施設）に落付いて、湯に入り浴衣姿で、大鼓三味線入りの宴会が始まる。お酌女もきれいどころが炭坑には揃えてある。日程の都合でお泊りになる殿方もある。何しろ街の料亭がまだ立直らない戦後の事で、石炭がダイヤモンド以上に尊い時代だから、権力者とそれに連なる石炭資本家の横暴さは、天下御免といった処だ。

こんな炭坑の状態は、朝鮮戦争まで続いた。右にならって労働組合の指導者づらしたボス達も、よく山へ来た。しかし、この方はせいぜいめしにありつくためである。私は一度、このボス達にこんなことを言ったことがある。

「あなた達も組合員に話の材料でも持って来ていただきたい。それと、空でもいいから弁当箱を持って来ること。そうすればあなた方を先輩として立て、空の弁当箱を充満させます」かようにちよいと強い調子だったので、それ以来、私が組合長任期中はボス達も吉隈坑には、顔を出さなくなった。この内三人の男は、まだ生存し〇〇議員の肩書をつけているので、あえて姓名を秘しておく。

選挙期の山は大変だ。ボスターが坑所内いたる処にベタベタ貼られ、総ての候補者が労働組合に挨拶に来る。私は一々候補者の挨拶を受けるのが厭で、選挙が始まると何時も向う側の診療所で事務をとったり、坑内へ下って坑員の苦情などを聞いて廻ったものである。

私が組合長になったとき、稲見や大野から「坑内へも時々さがらないと、坑員から文句をいわれるようになる」と忠告も受けていたし、自分自身もできるかぎり坑内を知っておきたいと思い、坑内巡視日程を組んでいた。私が坑内にさがるのは、色々な職種の人と話したり地質を聞いたり、ボタ石の名を覚えたり、ガスの濃度を計ったり、エアーの強弱を調べたりすることだけではない。私の独学、採鉱冶金を勉強する上にも、また組合長として、働く人との人間関係を深めるためにも必要なことであった。

しかし組合の仕事が繁雑になり、日程はよく狂った。ある日、私は小林熊男生産部長を伴い、弥栄坑へさがった。私が切羽のトラフ（石炭を箱まで流す幅六〇センチ位の形の長い鉄板）を向側へまたごとくしたとき、後にいた小林が「危い！」と大声で叫び私の背中を突いた。私はトラフの上に倒れると、石炭と一しよに、鉄板の上を一〇m程流された。流れ落ちた処は、空箱が石炭の流れを受けている樋口だった。

私がトラフをまたぎ向側へ渡っていたら、完全に落盤の下敷になっただろう。これは計画的に誰かが仕組んだワナであつたらしい。一番方の昇坑と入れ違いに私達はその切羽へ入ったのだから、二番方の係員もこの場所の支柱がはずされていることを、気づかない筈はない。だとすれば誰がかような殺人にもなりかねないイタズラを、寸刻の間に行ったのか、種々調査はされたが不明だった。私もまた、それを深く追求することをやめた。坑内における天井は、坑員の入坑直前は坑内職員によって点検されるのが普通で、先山も切羽の天井には常に注意を怠らない。この時の落盤は、天井状態から見ても、立ててあつた支柱をはずさない限り、起きる筈のない処であつた。誰が何のために？ 疑問は何時までも残つたが、だからといって私は坑内巡視をやめなかった。但し単独入坑はひかえた。三つの坑口を持つ吉隈坑の坑内を、頭の中に入れようとすることはしよせん無理とは知りながらも、採鉱課が発表

する採掘企画の書類及び図面をもって、請負単価の一部を決める賃金交渉に列席する私には坑内を知る必要があつた。それを狙つて用意された落盤と思われる節もあつた。小林は十六歳からの炭坑夫で、当時三十三歳のベテラン、私のために熱心に調べ、遂にそのイタズラ者をつかんだらしいが、私がそのことは忘れるからと取り上げないため、小林個人がその人間を糾明し不問に附した。

*

規約では組合長を含む総ての役員任期は一年である。私は昨年二月に、前任者の残留期間二カ月を含むいわゆる十四カ月の組合長であることを、当選時の総会で確認され、まあまあ十四カ月を経た。一九四八（昭和二三）年、改選期が来たので、今年も例年通り告示をしたが、三役のどれにも誰も候補者が名乗り出ず総会を開くことになった。

職場委員と代議員の一部はかわっていた。総会はその名の如く、全労働者の集会である。

私は杉藤方式の総会を試み、過去の形式を改めた。ちょっと異論も出たが、とに角私流で押し通した。第一目的は、私と末端労働者との意志の疎通を図るため、肩書を持たない者の発言を多く求め、その中から問題点をつかみ、今後の組合運営にプラスしようとの願いがあつ

た。しかし労働者は長い年月口を閉ざされていた関係か、発言者は意外に少なく予期に反した。結局、私の構想を述べ、反論もなく組合提出原案を採択し、役員を確認、大会を終了した。私はもう一年留任することとなった。

この年は全通の山猫争議（GHQの命名）を始め、官公労、東宝争議と大きな組織のストが相次ぎ、賃金のベースアップ、労働条件の改善などを闘い取っていた。

麻生鉱業も畳の表替えにからんで、ストの態勢を敷こうとして、連合組合の総会を開いた。総会と言っても、各山の三役と各山から二十人の代表が選出されて開くもので、総数二百人程、この総会は特異なことに来賓者は一人もいず、かわりに占領軍総司令部（GHQ）西部駐留軍から派遣された労働担当官バーロー大尉が、副官と通訳官（二世）を従え、議長席の横に鎮座しましたことだ。後でわかったことだが、今日の総会で、ストライキ決行の決議がなされる事を恐れ、会社がGHQに連絡したのだそう。当時、占領軍の親玉は、ダグラス・マッカーサー元帥。福岡県博多にいた西部駐留軍司令官は、アイケルバーカー中将。その下の労働担当官が、バーロー大尉であった。

代議員の発言は、何処の山も申し合わせたように、ストライキ決行を強調した。その中で

独り吉隈坑の代議員だけがストライキ決行に反対した。当然、反対理由の説明を求められた。その役割は私がすることになり、次のように私は説明した。

「労働者がストライキを以て闘おうとするには、それだけの理由がなければならぬし、労働者組織の大部分の意志が結集されねばならない。只今までの畳表替えに関する、会社側と連合幹部間の交渉結果報告では、両者間はまだ感情に走り、言葉の失言が深い根因となっているようにうかがえる。職員組合をまじえ会社、労組の三者協議会を開き、今一度討議を重ねる必要があると思う。その結果に於ては重大決定となることも止むを得ない。これは吉隈坑の代議員会ならびに総会での決定事項であることをつけ加える」

麻生連合の幹部達はいがけのない吉隈坑の発言で動揺し、議長が十分間の休憩を宣した。その間に各山の代表者が別室にあつまり、協議を重ねたが容易にまとまらず、十分の休憩が三十分になり、結局吉隈坑の意見を取上げ、この問題は再度三者協議会を持って検討することと解散した。

ところが、その翌々日、スト強行派と見なされた本間連合会長（芳雄製工所出身）及び中野外一名（赤坂坑）の三人に、GHQから出頭命令が届いた。吉隈坑の私の処へは警察電話で連絡があり、やはり同日私もGHQへ呼出された。四人は本社へ集り、占領軍払下げのジ

ープで、博多の司令部へ出頭した。五分程待たされた後、パーロー大尉の室に私以外の三人が呼び込まれ、三十分位で私と入替った。

私には、あの時吉隈坑が反対した理由を再度聞いたり、各山の労働者数を聞いたりした。私が各山の人員を正確に知らないと言えたら、パーロー大尉はどう受取ったのか「そんなことでコールマインの組合長が勤まるか」とえらい見幕である。私はそれをねとばすように「私は吉隈坑の組合長であり、他の山の従業員については、正確な数字は知らないと言え以外、答えようがない。おおよそその数字は知っていても、自分の山でさえ毎日異動している。それなのに、麻生一門だからといって他の山のことを正確に知るはずがないではないか」と反論した。これが昔の日本だったら大変な事になっていただろう。「上官に口答えするか」と頬がゆがむほどビンタをくったにちがいない。さすが民主主義のアメリカさんだ。オーケーでことなきを得た。

パーロー大尉と対談中に、煙草を吸うかと聞かれたので、イエスと答えると、二、三本減っている箱を私の前へ放り出し吸えという。私は、封を切つてない物なら頂ぐが、一本や二本なら吸うことを辞退するといいい、出された煙草に手をつけず、それより用件がすんだら早く帰りたいむねを告げた。パーロー大尉は下士官を呼び何事かを命じ、私を控室に案内し

た。そこには同行の三人もいた。間もなくジープが来て、私達は乗り込んだが、その時パーロー大尉から私に言つて、二十センチ角の箱が渡された。家に帰つて箱を開いたら、新しい煙草が入っていた。

帰路、車の中で四人が語り合った処によると、私以外の者は司令官からずいぶん手痛く叱責されたらしく、沖繩へ連れて行くぞとおどされ、訳もわからずひたすら頭を下げるのみだったらしい。GHQといえども理論に二つはなかった。私はパーロー大尉にも、その上官のアイケルバーカー中將にも、資本家の不当な行為を正すためには、最後の手段としてはストライキの決行も致し方のないことを充分説明しておいた。また、GHQも簡単にスト破りの指令を出さないよう要望もした。これらの事は、二世の通訳を差し挟んだ会話であり、最初のうちは険悪な空気の中で行われたために、たがいに語気も鋭く渡り合ったのだが、私はGHQから呼出しがかかった時から「GHQの労働組合への干渉を除去すべし」の心構えで出頭したので、順序を立てて話す中に次第に互いの感情もほぐれ、笑顔で会話を打切ることができたのである。

それ以来、パーロー大尉と親しくなり、大尉は吉隈炭坑にちよいちよい遊びに来るようになった。後にして思えば、あるいは私を監視する意味も含まれていたかも知れない。何年で

あったか記憶も薄れ思い出せないが、彼が本国へ転勤になる前のこと、吉隈坑へジープで来て私の家へ立寄った。その時、手土産に直径十五センチほどの菓子缶とビールの缶詰をもらった。彼持参のビールを飲みながら語りあったが、占領軍の将校が、たとえ組合長であったとしても、炭坑の一労働者と酒を飲み交すなどというのは聞いたこともないし、何のために私の処に出入するのか、一寸気持の上に引っ掛るものがあった。

帰り際にニュースペーパーを呉れと言われ、それも『平民新聞』の八二号と指定されて、驚くと同時に、納得がいった。八二号に私は共産党吉隈細胞に抗議する一文を書いている。それをほしがるからには、やはり占領軍は思想問題にも注意を払っているのだと思い当たった。何処でどう知ったのか、私が『平民新聞』を散布していることも、アナキストであることも既に知っていたのである。バーロー大尉が帰国した後、私も病気のため、炭坑を退山することになるが、占領軍に代って、今度は法務局や警察署の警備課から、月に一、二回訪問をうけるようになった。

福佐新聞会と無政府農園

戦後のインフレ景気は、労働者の賃金ベースアップ運動となり、全国あらゆる産業の労働者はストライキを含む闘争に明け暮れた。吉隈炭坑も常時緊張状態で、資本家側と接渉を持ち、賃金ベースアップ、福祉厚生施設の改善を闘い取って行ったが、残念ながらベースアップより物価の上昇の方が先行することは現在と同じである。しかし、私の組合長時代は、幸か不幸かストライキをさけることができた。

当時、物価の上昇に見合って『平民新聞』の版価も次のように変動している（次頁参照）。近藤憲二さんが新聞編集を辞めてから、岡山の高畑信一、広島の栗原一夫と、次第に西部へと編集発行も移って行くが、こと新聞に関する限り、副島辰巳、井原末九郎らを中心とした九州地協の活躍は、戦後に於けるアナキスト連盟運動の記録に特記すべき事であろう。前にも少し触れたように、私がアナ連の存在を知ったのも、副島が売っていた『平民新聞』からであり、確か三六・三七号の合併号だったと思う。それは一九四七年夏も終りに近い頃だ。それ以来、私は九州地協の一員として活動に参加した。メンバーのうちほとんどは二十

年 月 日	定価 (円)	送料 (円)
1946年 6月15日	(創刊号) @ 0.30 第三種郵便物 17号より 第三許可	0.05 (週 刊)
47 2 24	27号	0.50
" 5 21	33号	1.00
" 7 16	45号	1.50
" 10 17	80号	2.50
48 7 12	111号	5.00
49 3 14	126号	5.00
" 7 18		

利益金や、井原の私財投入など、献身的努力で補っていった。しかしそれにも限度があり遂に新聞会を解散するに至った。

『平民新聞』の最大発行時は三万五千部に及び、その大部分の販売は福佐新聞会が受持った。紙の配給を十万部まで高めて政府へ陳情するのだと、副島がいきり立った時代もあった。なにしろ福佐新聞会の連中は無政府主義を掲げて東北地方まで足をのばした時であり、

歳前後の青年であり、山口・藤川・池田・吉良・御幡らがいた。福佐新聞会は、井原を中心に、共同体を構成していた。副島の構想では、新聞売上金のうち一円を連盟に納め、五十銭を積立てる(当時『平民新聞』は一部一円五十銭)。その積立金で運動資金、扶助金、共同事業資金に充当するつもりであった。四四号(一万二千部)から五五号まで、十二回分を試しに積立てたが、取扱部数の増減もあり、収入六万三百四十円となった。しかし会員申合せによる、行動日の食費、会場費、扶助費などの支出が多く、赤字二千二百円を出した(一九四八年一月の副島発表による)。こうした赤字を副島および小副川善吾の博多人形製作による

新聞売りや街頭宣伝のベテラン揃いで、官憲や鉄道公安員とのトラブルも起きた。

最も激しかったのは、小山一弥である。いつものように彼は佐賀から長崎へかけて、列車内で新聞を売ったが、たまたま闇米移動取締官と逢い、小山はかつぎ屋(闇米を運搬して糊口をしのいでいる女達)の持っている米を、取締官達に没収されるのを防いでやるため、進行中の列車の窓から、米袋を外へ放り出したり、公安官の行手を遮ぎったりして、十数人のかつぎ屋を全部逃してやった。あの大きな体格の小山が暴れ廻るさまを睨むと、いかに公安官が手こずったか想像がつく。さて、公安官らも手がつけられず、途中の駅で警察官の乗車を求め、小山を公務執行妨害罪で起訴した(のち六カ月の実刑を受け、長崎刑務所に送られた)。小山が長崎検察庁送りとなった頃は、新聞の売行も悪くなり、博多人形もまだ軌道に乗らず、副島も四苦八苦だった。

小山の保釈金も算段出来ずじまいで、私とその事情を小山に伝えるべく、長崎地方裁判所へ出かねばならない次第であった。悪い事は重なるというのか、久留米の鞍打辰雄が、トラックの積荷のくずれで怪我をしたのもこの前後である。そちらの賠償の交渉には、貝島大之浦炭坑にいた居染初蔵が当った。この頃、九州地協はしばしば会合を持ち、討議を重ねたがどうにもならず、遂に福佐新聞会は解散することになった。そして井原末九郎が自分の所

有である太良町の山林・田畑約二町歩を、無政府農園として投出し、新聞会で働いた若者の精神的よりどころの一環としたのである。

井原に言わしむれば、無政府農園の件は、アナキスト好みで過大評価され、『平民新聞』売りはアナキスト好みでなかったとみえて甚だ過少評価されているようだ。実は、無政府農園は『平民新聞』売りの残務整理のひとつまでであった。副島の家族ぐるみ上京（一九四九年一月）は、東京での『平民新聞』発行の大詰になった。一九四六（昭和二十一年）年秋より一九四八年夏まで、二万〜三万五千の発行部数の大部分は、福佐新聞会によって頒布され、紙代のほとんど全部は売上金の有無にかかわらず、新聞会の責任において納金した。新聞を売ることにて於て無政府主義運動に参加し重要な役割を果たした、という誇りの持込場として絶好の場面と考え、無政府農園という一つのクッションを置き、気分的に若い人達を緩和したと思う。新聞売り組織の運営は二年間だが、たしかに大仕事だった。無政府農園は、その中の氷山の一角よりなお低い存在なのに、それを高く評価して、新聞売りを評価出来なかったアナキスト達に愛想がつきる思いだった。

しかし、この農園共同体も一九四九年五月に解体し、その中の藤川、御幡、末次の三人が吉隈坑へ入山した。三人は私と共に吉隈坑で活動が続けていたが、私の指導も行届かなかった

たのか、常に職員や寮生と意見を異にし、結局三人は、三十日足らずで一人ずつ退山してしまった。炭坑の仕事は個人プレーではなく、二十人なり三十人なりの共同作業であるため、彼等が新聞売りや無政府農園での体験とは異り、ある程度の妥協と言うか協調と言うか、作業上の忍耐を持つ事は必要であった。三人は余りにも若く、無鉄砲すぎ、御幡は二十日、末次は二十二日と相次いで退山してしまった。残った藤川も彼等二人と同一視されて落付かず三十数日で郷里へ帰った。私としては副島からの依頼もあり、今後の活動が続ける上に、仲間として大いに期待していたのに残念であった。

彼等の退山後、GHQ指示による、レッドパージが強行される。

まもなく私は組合長を二期でやめた。労務課へ戻ったが、病気で療養勝ちの日々だった。その間たまたま労務課管轄の保育所運営にタッチしたことから、保母の資質向上と待遇改善のため、保育所連盟の結成を図り、初代保育所連盟会長になったりしたが、とうとう炭坑を退山することとなった。また事情があつて妻節子と協議離婚した。

『自由共産新聞』と『平民新聞』

前記のように、私の炭坑在住期間は五年にすぎなかったが、時期が終戦直後のことではあるし、次々につき当る問題は山積していた。外地よりの引揚者・戦災者についても、炭坑とて他地方に比し例外ではない。時々町役場を通じ、彼等に対する物資の配給が行われたが、その配分は非常に不合理なものであった。大まかな比率ではあるが、当時町内の引揚者、戦災者の比率は引揚者二〇％、戦災者八〇％で、それに対する物資の配給は、引揚者へ六〇％戦災者へ四〇％だった。数字の上でも大きな開きだが、実際に品物が動いてみると、戦災者がいかに冷遇されているかが実感される。私は、引揚者も戦災者も敗戦による痛みは同格で、もし多少とも国の援助があるとすれば、一律に受けるべきものだと思うたので町役場に抗議することにした。引揚者・戦災者からの代表各一名、それに矢野書記長を加えて、共々、町長に面会を求めた。役場の言い分はこうであった。

「引揚者はほとんどが裸一貫、命からがら帰国したのだが、戦災者の被害程度には個人差があり、無一物の人は少ない」

これが全く憶測による、みみっちい考えであることは、今思いかえしてもおかしいほどだが、役場吏員のこの「理由」とするところをくつがえすことは、私等が数回足を運び、物資配給に立合うという条件を吞ませた上で、やっと実現したのだった。

その頃、三井・三菱・住友など、いわゆる大手筋の炭坑では、すでに保養施設、福祉厚生施設など備っていたが、地方大手と言われる、麻生のような大人数を抱えた炭坑でも、予防医学的厚生施設は何もなかった。麻生健康保険組合は結成していたが、治療医学に重点がおかれ、その他の福祉厚生にはまだ手がつかなかったのである。私は労働組合長を辞めるとすぐに、皆の要望で労働者代表理事を務めることになった。これをきっかけに、かねがね懸案の託児所、海浜保養所、洗濯屋、美容院、理容院などの設置運動にとりかかった。まず炭住を借り受け、クリーニング屋、時計屋、美容院、理容院などを組合管理下に置いて、いくらかでも組合員の経費を軽くするようにした。次に健康運営協議会へ保養所設置を提案して、玄海灘に面した津屋崎という海岸に、従業員の保養所を設けることに成功した。

退山したあと、すこし体が回復した私は、ほとんど独力で『自由共産新聞』を発行しはじめた。

そのころまた、ふとした縁で現在の妻と結婚し、桂子を連れて農家入りすることになった。一九五〇（昭和二五）年八月頃のことである。その家は、代々の地付きで、妻の父はすでに死亡、母が農業を営みながら子供を育てた。戦前の所有田畑は終戦後の農地解放で大部分を小作人に取られ、残った一町余りを細々と耕していた。母の里も近在の地主で、こうした処に娘婿が子持ちで入り込んだのだから、注視的になるのは当然だった。村人の噂に耐えて私を理解し病弱の身をいたわってくれた家の人や、縁者の方々に守られて、私は自由な日を送るようになった。だからと言って私は毎日遊んでいたわけではない。自分の出来る範囲の手伝いをした。たとえば出荷する野菜を洗ったり束ねたり、時には田圃ヘリヤカーを引いて行ったり、そのうち次第に百姓仕事にも慣れていった。雨の日など手伝う仕事もないので、何か自分で出来る事を考えた末、ムシロやカマスを作ることにした。

昼はその仕事、夜は新聞の原稿書きと、大体の構想を決めて初めたが、米を入れるカマスを作るのは容易でなかった。ムシロもカマスも藁を機械で織るのだが、織り上げた後の仕事が大変である。カマスの場合規格があって薄くても厚くてもいけない。また陽に干してミ

ガキをかけつやを出すという作業もある。私のやさしい手では、手が荒れるわりに金もうけにならない。こんな事では将来性が無いと見切をつけ、三カ月余りで、十万円もかけた機械類一式を四万円の値で売却した。

その頃、家の入口に『自由共産新聞』の看板を掛け、ガリ版刷りで月刊紙を出した。この新聞は九号で終るが、福岡の連中も、副島が東京から帰り、井原、小副川の三人で博多人形製作を軌道に乗せ、動き出していた。

東京から一年振りで帰った副島が、私のガリ版刷りの新聞を見て、休刊してしまっている『平民新聞』をガリ版で出そうと意気込み、一九五一（昭和二六）年の十二月十五日より再三回刊の『平民新聞』が発刊される。

一号から二二号まで杉藤、二三号から三三三号山口健二、三三三号から四三三号杉藤、四四号から五〇号副島と、ガリ切りから印刷発送まで各自一人で行ったものである。ガリ版で新聞大の四頁を刷ることは、一まわり大きい自作の謄写版でも骨の折れる仕事だった。当時の私は病弱ながら気力が満ちあふれていたから出来たものと思う。（一九五二年の秋、山口健二が来て二日ばかりいた。彼は血のメーデーで暴れ、うまく逃れ出て検束を免れ、全国の同志宅

を転々と渡り歩いていて。彼は副島の処から私の方に廻って来たのだが、私のガリ版印刷に感銘を受けたらしく、自分から買って出て二三号からガリ切り、印刷、発行をするようになった。しかし結果的には専念出来ず、三三号からまた私が引受けねばならなかったのである。

新聞の他に、ガリ版でパンフレットも発行した。主なものは、M・L・ベルネリ著、大沢正道訳の『スターリン・ロシアの労働者』フィリップ・サムソン著、大沢訳『サンジカリズム』（後日大阪自由市民社から活字で再版）ピーター・ブランド著、副島訳『自由への道』である。当時のアナキスト連盟には、機関紙を発行する資力に乏しく、それに輪をかける意見の不一致など、空白沈滞の時期だったので、私のガリ版は多くの同志から激励を受けたものだ。しかし残念ながら、激励だけで出版活動が出来るものではない。出版には金と労力と原稿を必要とする。この三者がどれ一つ欠けても長続きしない。原稿は、近藤憲二・久保譲・大門一樹・山鹿泰治・大沢正道氏の協力で大丈夫だった。中でも近憲さんの『日本アナキズム運動史』は注目を引いた。金は博多の連中が何とか工面してくれた。しかし労力は、私が病身で療養所や病院を出たり入ったりだったので、定期出版も狂いがちとなった。今一つガリ版を切るにはある程度の技術を要した。力を適当に根気よく切った原紙は、刷り上げて

も読み易いが、原紙切りがまずいと紙面も見づらく、立派な原稿も死んでしまう。ひいては読者にも影響する。今から思うと、私は若い人を後継者として育てていく上に包容力に欠けていたことを反省している。折角の新聞をあこの程度に終らせてしまったのも、責任の一端は私自身にあるのではないか……。

*

一九五二（昭和二七）年には秋から冬にかけて、電産スト、炭労ストと長期間にわたる基幹産業のストライキが横行する一方、権力者は破壊活動防止法を作って、労働者を不当に圧迫する。警察予備隊が保安隊（今日の自衛隊の前身）に組織変えして、次第に軍国調を整えて行く。その中で町村に教育委員会の設置を見ることがとなり、初めての公選が行われる。私の住む穂波村（翌年に町制施行）も、ボス共を抱き込んで、炭坑の医師を委員候補に押し立て現職の中学校教諭らがメガホンを持ち、自転車に乗って村中を馳せ廻り叫んで歩く。村民には教育委員がどのような役目かもわからない。走り回る運動員の顔によって一票が動く。私はある夜、公民館で行われた推薦演説会で、教育委員に立候補している増田という医者に、教育行政の構想を質問した。その回答は、私の質問とは凡そ縁遠く、彼自身教育委員の成す

べき役目を知ってはいなかった。当時の候補者は大同小異、大体そんなものであった。真に教育行政の改善を意図するものは、立候補すること自体晴れがましい思いで名乗り出なかった。何時の時代でも大衆が選び出すということはなく、僅かな数の権力者によって政治は行われる。私は公民館で発言以来「飯塚の共産党」と蔭口をされるようになった。その頃は全国いたる処でレッドパージにあった連中が訴訟を起こし、裁判闘争が行われ、三鷹・松川事件も尾を引いていた。改革論や新しい構想の発言者は総て「アカ」のレッテルを貼られ、就職も出来ず生活に苦しんだものである。私も前述のように、農家の入口に『自由共産新聞』とか『平民新聞』の看板を掲げ、サンドウィッチマン姿で街へ出たり、博多の副島や井原も又同じ姿で私の処に出入りする。世間は、アカ・クロの見分けがつかず総称して「アカ」と言うのである。私はそんなことにかまわず、自分の出来る範囲で農作業を手伝っていた。さすがに妻の母は「家の周囲だけは、看板（サンドウィッチ板）を取って歩いてつかせ」と言うので、それ以来私は母の言葉を守った。

*

私は二月という月に興味を持つ。炭坑の組合長に選ばれたのが一九四七年二月。そして一

九五三（昭和二八）年二月、部落のボスが私の処へ来て、駐在員をしてくれと言う。駐在員というのは都市に於ける町内会長の如きもので、役場の通達事項を部落内へ知らせたり、転出入の証明書を発行したりする、役場の出先機関であり小使である。部落内の家族名簿を持ち、出産・死亡等の届出にも駐在員の印がいる。役場から、受持戸数によってわずかながら毎月の手当が出る。まあ一種の名誉職である。本来公選によるべき性質のものであるが、この秋松部落は昔から名門がこの職を受継いで来た。今までこの役目を受持っていた人が、家庭の事情で役目を辞任したので、部落の顧問格が話合って、後任者には私が適任だと決めたらしい。私も定職がある身ではないし、月々にいくらかの収入も得られるので引受けることにした。翌三月には、公民館長の改選が行われ、選挙で私が選ばれ、私は実質的な部落長になった。部落の人々は本家の婿という以外何も知らず、アカという噂も次第に消え、私を部落の指導者として立ててくれるようになった。私もまた公民館長として新時代の気風を吹き込むことに努めた。これは権力行使ではなく、教育の分野である。私は『あきまつ』という公民館報を自費出版し、部落に於ける封建制打破に努力した。